まえがき

著者が初めてコンピュータに触れたのは昭和も終わりに近づいた頃、今から二十数年前のことである。当時コンピュータは理系出身の技術者や一部の好事家が扱う特殊な機械であり、一般の会社員や主婦、学生にとっては縁遠い存在であった。そのため中高生がコンピュータを使っている（と言っても、実体はゲームや簡単なプログラミング程度だが）と言うと奇異な目で見られるか、あるいは一種の特殊な能力がある学生であるかのように誤解されることも多かった。

あれから四半世紀が経ち、今日ではその状況は驚くほど一変している。

一般家庭にはごく当たり前のようにパソコンをはじめとした情報機器が氾濫し、高校教育において学習指導要領で情報科目が必須とされるだけでなく、小中学校においても基礎的なコンピュータ教育が行われている。また企業においては事務処理のコンピュータ化に始まり、経営者の意思決定支援や同業他社との競争における戦略的な武器として、そして現在ではネットワークを介したコンピュータシステムを運営することに特化したビジネスモデルを持つ世界的な大企業が登場するに至っている。

身近なところに目を転じれば、大学生活においてもこの流れは顕著である。講義で提出を求められたレポートをワープロで作成するといった単純な作業だけでなく、科目履修の登録や成績管理、果ては就職活動でのエントリーや自己 PR すらもコンピュータやインターネットを用いて行われる…、そんなことがごく当たり前に行われている。

すなわち、すでにコンピュータは一部の限られた人のための特殊な道具ではなく、21世紀を迎えた今日においては、社会生活を営むうえで欠かすことができない重要なツールであるといえるだろう。

しかし残念なことに、いわゆる文系といわれる学生の中にはコンピュータに対して苦手意識を持つ者も多い。コンピュータに触れる機会が得られなかったのか、それとも高校時代の情報の授業が肌に合わなかったのかは定かではないが、毎年入学する学生から「先生、私はコンピュータが苦手です」と申告されるたびに、ああ、この学生は将来ちゃんと社会へ出て行けるのだろうかと心悩ませることも多い。

本書はそのようなコンピュータが苦手という意識を持つ文系の大学生を対象に、少しでもコンピュータの基礎を知ってもらいたいという意図で執筆されている。本書を元に学ん

だ結果、コンピュータやソフトウェアの扱いがうまくなることはないかもしれないが、コンピュータとはどのようなものか、どういった仕組みで動くものであるかを知ることはできるだろう。そして、そのような基礎知識があればこそ、新しい技術が誕生した際に柔軟に対応することができるということを心にとめ、勉学に励んでいただきたい。

本書は半期 15 回という少ない回数で行われるコンピュータ概論の講義にあわせて編成を行った章構成となっているため、なかには紙面および講義回数、講義時間枠の都合からやむなく割愛した事項も数多く存在する。したがって、本書に記載された内容がコンピュータの基礎に関するすべてではなく、あくまでもコンピュータというものの概略を知るうえで最も基礎となるエッセンスのみが記されているということを承知いただきたい。

また本書は、独立行政法人情報処理推進機構（IPA）が主催する国家試験である情報処理技術者試験のうち、レベル 1（入門レベル）の試験である IT パスポート試験のテクノロジ系分野における出題範囲の多くを網羅している。同試験は情報社会において活躍するためには必須とも言える情報処理を学ぶための最初の一歩に最適な資格であるため、将来情報社会で活躍するビジネスマンとなる学生諸君は、ぜひ本書の内容を最初の足がかりとしてこの試験に挑んでいただきたい。

末尾ではあるが、本書の執筆にあたり、計算機の歴史を辿るうえで貴重な資料となる写真をご提供いただいた大駒誠一先生に、また本書を手がける機会とそもそも著者が大学の教壇へ立つ機会を作ってくださった恩師、近畿大学名誉教授の田中 弘先生に、多大なる感謝を捧げるものである。

2011 年 2 月

鞆 大輔